

一杯飲み屋でチャンチキチャンチキ 国民歌手へのとば口がこの歌だった

三波春夫『チャンチキおけさ』

昭和歌謡

誕生物語

第10曲 日文・山川晋

「用がわびしい踏地まの
屋台の酒のはろ苦さく」

長津義司の詞は起首でそう嘆いた

時は昭和32年

東京の人口が世界一となる

神武景気に沸く前年、経済白書は

「もはや戦後ではない」と謳い

国は上げて経済成長へ突き進む

と思っただが転瞬、鍋底不況へ

へ知らぬ間士が

小唄唄いでチャンチキおけさ

おけさ切なややるせなや

と詠いた詞は世相への慨嘆だった

庶民は不況にあえぎ破れかぶれ

が、世の暗潮を突きながら

歌声はあまりにも明るかった

まるで反語を業しむかのように

曲は売れた

三波春夫の天性の明朗声質が

不況を嘲笑って出世譚に変えた

希有な歌手：誕生の祝い歌

それが「チャンチキおけさ」だった

朗らかな笑顔と浪曲で
鍛えた美声、そして歌

謡界に初めて和服姿で登場し
た歌手——それが、お客様は

神様です」でお馴染みの三波
春夫である。

歌との出会いは三波が7歳
の時、母親が腸チフスで亡く

なり、不憫に思った父親が仏
壇の前に子供たちを正座させ、

江差追分などの民謡を聞かせ
たことがきっかけだった。

そんな少年が築地で仲買人
をしていた伯父の店、川悦に

就職したのは、15歳の時。仕
事が終わると魚を入れる木箱

を重ね即席演台で浪曲を歌っ
ていたが、八丁堀で、浪曲学校

卒業生大会」を聴いたことで、
「俺の進む道はこれしかない

い」と決意。日本浪曲学校を
経て少年浪曲家としてデビュ

ーした。持つて生まれた才能な
のだらう、1年8か月後には

南條文若という一枚看板で初

の遊業を行なうまでになった。

ところが、昭和19年1月、徴
兵先の満洲で侵攻してきたソ

連軍に敗戦。捕虜となり、な
んと22歳から26歳までの約4

年間、シベリアのハバロフス
ク収容所で抑留生活を過ごす

ことになるのだ。

帰国したのは昭和24年の9
月だった。三波は浪曲師とし

て復帰するも、時代の流れは
流行歌や大衆歌謡へと移行し

ていた。加えて、「おんな船頭
唄」を引っ提げ、民謡歌手から

歌謡界にデビューしていた三
橋美智也の存在も大きな刺激

になった。

「民謡調の歌謡曲がヒットす
るのなら、浪曲調歌謡曲。の世

界があってもいいはずだ」

三味線一本の浪曲師として
の活動に見切りをつけた彼は

昭和32年6月、芸名を「三波春
夫」と改めて歌謡界へデビュ

ンチキおけさ」だった。

「チャンチキ」とは、皿のよう
な形をした金属製の打楽器で

コンチキ、チャンギリとも呼
ばれ、阿波踊りでも用いられ

ている。

この曲が発売された昭和32
年は、「鍋底不況」の真っ只中。

サフラーマンの給料も、商店
や町工場の売り上げも底に貼

りついたまま、庶民はそう
した憂さを、一杯飲み屋や屋

台で晴らした。酔っ払った男
たちが屋台で小皿を打楽器の

ように答で叩いて調子を取る
様は、チャンチキ「さながら。

それが、この曲を大ヒットに
導いた。

昭和33年7月には同名の
映画が封切られ、三波も出演

人気を博した。その後も、「東
京五輪音頭」や「世界の国から

こんにちは」など戦後日本復
興の象徴ともいえる平和祭典

のテーマソングを生涯通して



大切に歌い続けた三波春夫。

三波がじくなつて、今春で

14年(平成13年)没。生前に発

表した楽曲数は約1000曲。

シングル総売り上げは300

0万枚を超える。三波春夫は

圧倒的な存在感で、時代の象

徴として輝き続け、「国民歌

手」に駆け上がっていた。■

Yasuharu Gai

1962年東京生まれ、テレビ制作会社
制作記者を経てフリーランスに。
著書に『東方神起の謎』『東方神起
J-POPをゆく』(共にイーストプレス)。
『ヒーローランド』(イーストプレス)。
(フリーブル出版)など。
また、曲調プロデュース作品として
『生きる 進撃歌集』(スターツ出版)。
『デキる社員』(狂食ギヤル) (共にイースト
プレス)など多数。